

熱戦のエピローグ④

@新人参考大会

オオスカシバ

前回のあらすじ

夏のある日、市内の卓球部員のお悩みを解決するブルーギルズは、木ノ道中のエースであり、ものづくり部と兼部している加賀珠美から、「開発した幼竜型セラピーロボ、ネモフィラちゃんの被験者になったもらいたい」と依頼を受けていた。無事に実験は成功し、お礼としてもものづくり部の菓子パに招待され彼女の幼馴染かつ親友である高坂翠とも仲良くなった。別れ際、翠はブルーギルズのメンバーに、珠美にまつわる意味深なメッセージを残し、彼女たちに不信感を抱かせた。

翠は元から病弱で、ブルーギルズと出会った日からほどなくして風邪をこじらせ亡くなってしまった。単に親しかっただけでなく、ある理由から彼女を心の支えとしてきた珠美はショックで不登校になり、数日後に控えていた夏体も棄権してしまった。やがてブルーギルズのメンバーも翠の死を知って彼女のことが心配になり、夏体の会場でなんとなく木ノ道中女卓の集団を偵察しに行った。そこでは、他の部員たちが本人不在をいいことに珠美の悪口を言っていた。以前から彼女を仲間外れにし、現在進行形でいじめが行われているという悲惨な現実を知り、メンバーの心にひびが入り活動を続ける意欲が失

せてしまった。しかし、心のどこかで、諦めたくない、珠美を救いたいという新しい情熱が芽生えてきたのであった。

実は、珠美が夏体を休んだのは、いじめが原因ではなく翠の死のショックによるものだった。だから、その後は部活へ行っていた。行くしかなかった。

翠の死という突然の事件が心の止めとなり、不登校になるといじめサイドは予測していた。だが、どういうわけかその予測を裏切り練習に参加し続けた。

顧問はパソコンで何か作業しながら、時々練習に目をつけている。副顧問も部員たちのためにと一年生に交って球拾いをしている。いじめには気づかれていないものの、厄介な監視の前では練習相手をおくしかなかった。

「加賀さん、もつと他の人たちとコミュニケーションはとらなきゃいけませんよ」

部活の面談で顧問が言った。

「はい……」

感づかれたか？　と思い、鼓動が速まるのを感じた。

「みんなと何かあったのですか？」

「いえ、何もありません！」

「そうですか……」

平然としたリアクションに深入りできなかった。これ以上触れないで！　親にも言わないで！　と祈っていた珠美は、地震が治まった時のように落ち着いた。

「高坂さんもまさか、ああなるとはね……まだ辛いでしょう」

話題を変えてきた。

「少しずつ元の生活に戻っていけばいいよ」

輪から外れている原因が、翠との死別のショックによるものだと読んだのだろうか。彼女の必死の返答によって、いじめの線を外した。

「先帰っていいよ！」

数か月前まで一緒に帰っていた部員が、毎日笑顔で言うてくるようになった。珠美はそこまで鈍感じゃない。裏で群れて話に花を咲かせていることくらい容易に想像できていた。

一人で歩いている彼女を、休憩中だった野球部の二年生数人が見ている。

「やっぱおかしいよな」

「ぜってー隠してるって」

固まって話していた。

珠美はエレベーターを十階で降りた。二階建て一軒家の集まるエリアに堂々と建つ、十五階建てタワーマンションに住んでいる。地上から見上げれば、太陽をも貫きそうな迫力がある。

「ただいま！」

いつも通り明るい声で上がりこんだ。

「おかえり。お腹すいてるでしょ。金色屋のチーズパンが買えたから食べていいわよ」

「ありがとう！」

中心にたっぷりチーズがまったそれは珠美の大好物だ。少しだけトースターに入れて、ほどよく溶かして食べるのがベストである。

早く中心にたどり着きたくて、一気に頬張る。固めのしつかりした生地で、口内がパサつかない。やがて旨味と塩味が広がる。おいしい。でも、なぜか最近少し不味くなった気がした。録画してあるギャグアニメも、あまり面白くない。

「最近部活はどうなの？　みんなと仲良くやってる？」
台所から母が聞いてきた。珠美はチーズの塊をのどに

詰まらせそうになった。

「んんー？」

口がいつばいで話せないふりをし、答えを考える時間を稼いだ。

「大丈夫だって！ 今日だってさ、〇〇ちゃんとかと替え歌大会してさ、笑いすぎて腹筋に穴が開きそうだよ」

「そう。よかったわ。小学校の時にもいろいろあったから、今楽しいって聞けて嬉しいわ」

母は何の疑いも持っていない様子だった。

「ごちそうさま。ちよつと出かけてくるね」

「あら、夕立には気を付けるのよ」

これ以上家にいるのは危険と判断した。

午後は自転車ですらふらと街をさまよった。どこの店に行きたいわけでもない。ただ親から離れて、部活の話が振られるリスクを減らしたかった。完璧に隠し通せる保証はない。だから家族と過ごす時間が怖かった。

どこもかしこも、セミの鳴き声であふれかえっている。

それと一変、爽やかなせせらぎに包まれた川沿いを走りながら、両親のことを思い浮かべた。小学二年生の時も後の卓球部メンバーとは別の人たちにいじめられた。問題児男子からの暴力、リーダー格女子からの陰口。珠美は親から隠そうと黙っていた。しかし、心配した他の子供やママ友の機転で伝わってしまった。

いじめっ子二人は当然叱られ、珠美の母に理由も尋ね

られた。

「珠美ちゃんは暗くて、喋らなくて、キモいから」

二人とも同じ答えを出した。それを聞いた母は大いに悲しみ、しばらく体調をくずしてしまった。そのため珠美は、ばらした人たちに強い憎しみを覚えた。

父は物静かな人だった。それでも、学会発表になると流ちょうにスピーチをし、質問にも戸惑いを見せずに答えていた。人気者とまではいかなかったも、悪い評判が立つことはなかった。それを見た珠美は、父みたいになれたいと思われなくなると考え、工学の世界に足を踏み入れた。父親から学び技術が上がって露出が増えていくと、話術の向上はもちろん、外見にも気を遣うようになり、誰にも文句を言わせない陽キャに変貌した。

なのに、再びいじめられている。その事実が再び母の耳に入ったら、本当に壊れてしまうかもしれない。知らん顔しているだけでは周りに心配されてしまう。だから自分から何でもないアピールをして、いじめをもみ消そうとした。

小川の岩に、一羽のカワセミが止まっているのを見つけた。翠が生前「翠には緑っていう意味もあるけど、雌のカワセミも表すんだって」と教えてくれたのを思い出した。あれは彼女の生まれ変わりだろうか？ と思いを馳せる。

卓球部で辛くても、ものづくり部に行けば彼女がいた。

普段は病弱な彼女の方から甘えてきたが、部活の時は逆を演じてみた。本当はそのまま泣きついて、事実を打ち明けたってよかった。けれど、彼女がよかれと思っただけの両親に伝えてしまったら、一生翠を憎むことになるかもしれない。だからできなかった。

「元氣だったら、卓球部でも一緒にいられたのに」

いつかの翠の発言を思い出す。彼女が真実を知っていたとしたら？ 自分の嘘の真意に気づき行動を起こす勇気を奪ってしまったなら、彼女は後悔を残したまま、珠美の未来を心配しながらこの世を去ったことになる。

珠美はグッと目を閉じて

「ごめんね、ごめんね。友達なのに嘘ついて……」

何度も謝った。カワセミは警戒したのか飛び去ってしまった。

このままだと、誰も幸せにはならない。そう悟った。

今いる場所からはタワーマンションがよく見える。十階のあたりを見た後、屋上に視線を移す。悪魔のささやきが聞こえたが、すぐに振り払った。確実に周囲が不幸になることはしないと誓い、苦しみと戦い続けることを選んだ。

午後二時、塾での授業中、綾音から二人に「放課後豊沼公園でミーティング」と書かれたノートの切れ端がリ

レーされた。いじめを目の当たりにして一度は心が折れたものの、珠美を助けたという気持ちは三人とも失っていなかった。

靴の裏が溶けてしまいそうなアスファルトの海を歩き、三人はコンビニで飲み物を買ってから公園の東屋に行った。腰を下ろすと、綾音がスマホを取り出した。

「二人に内緒で情報収集してさ」

そう言うと、誰かとのトークルームを開いた。

「小学校の習字の友達に、木中に行った子がいたの思い出したんだ」

綾音の人脈の広さに二人は改めて感心した。

「結論から言うと、ほぼ間違いなくいじめの事実があると言っている」

綾音の友人によると、他の部活による「一人ぼっちの珠美」目撃情報が多発し、噂が広がったらしい。

「つまり、外野も把握はしてるってことか」

桃花は腕を組んで天を仰いだ。

「待った！ みんな気づいてるのに、どうして誰も声をあげないの？」

涼花が訊ねた。

「いい質問だね」

綾音は、待ってました！ という表情を見せると、再びスマホを操作した。ひと時の静寂が訪れ、背後で子供のはしゃぎ声がこだまする。

「あつちは嫌々でも練習につきあつて平穩を装つてるし、珠美も珠美でいじめの事実を隠そうとしてるからなんだ」「隠す？」

涼花はその答えが腑に落ちない様子だった。

「噂になっているとは知らずに、本人はさも部活に問題なく楽しんでるかのようにアピールしてるんだとか」

「どういうことをしてるの？」

「大会が楽しみだとか、誰々とこんなことをしたとか、明るい話ばかりしてるんだって」

話が具体的だと嘘をついている可能性がある。テレビでメンタリストが話していたのを思い出し、涼花は頷いた。

「嘘をついてたつてことか」

「そう。その必死さから本人が隠したがつてることを察して、先生とかに相談するのをためらっちゃうみたい」

綾音が髪を耳に掛け直した。

「でも、珠美だつてこんな状況から抜け出したいだろうに、なんで隠そうとするの？」

さらに追及した。

「友達の推測ではあるけど……珠美は優しい子。いじめが発覚したら、親とか、周りの人が悲しむことを気にしてたんだよ」

涼花は下を向いて黙ったまま、拳を握った。彼女の優しさにつけこんで標的にしたのだったら、到底許せなか

つた。

「私たちに言ってくればよかったのに……」

桃花が言った。

「私たちに教えたなら、下手に行動起こされて、いじめの事実が公になるリスクを恐れたんだと思う。逆にこっちからさりげなく聞いたとしても、ダメだったと思う」

綾音が首を振った。

「きつと、いじめから解放されたいっていう気持ちと、知られたくないっていう気持ちの狭間で苦しんでるんだと思う」

スマホを膝の上に置き、二人を見た。

「理想的な解決策は、先生や珠美を介さずに、私たちが向こうの部員で話し合つて、なんとか反省してもらうのが現実的だと思う。珠美へのネタばらしは部内に平和が戻つてからすればいい」

そう言い終えると、テーブルの上のコーラを飲んだ。

ペットボトルを置くと、底の方からゆっくりと小胞が湧いていった。

「あくまでも私の意見だから、二人で話し合つて案が出たら、それで構わない。何か決まったら連絡して」

おおまかな方向性が決まった。

翌日の練習の休憩時間、二人は例の話をしていて。緑

の防球ネットの向こうでは、バスケット部の顧問が相変わらず怒号をあげていた。珠美の残酷な非日常からわずか数キロメートル先の体育館で、二人の日常が過ぎていく。

「和解が一番だけど、部外者のうちらがどう入り込めばいいか分からないよねー」

桃花がため息をついた。

「話に説得力持たせるのも難しいし」

涼花も頭を悩ませてるようだった。

「ねえ、桃花。やっぱり作戦を変えた方がいいと思う」

「えっ？」

突然の提案に驚き、数回まばたきしながら彼女の方を見た。

「説得して素直に受け入れるような相手だったら、ここまできじめは酷くなってるよ」

さらに付け加える。

「私たちが代わりになってさ、どこかに練習しに行ったり、遊びにも行つてさ、少しでも普段の部活を楽に過ごせるようにした方がいいんじゃないかな？」

桃花は目を見開いた。衝撃的な答えに一瞬息が止まった。たちまち首にかけていたタオルを外すと、ハリセンのように振りかざして思いつきり涼花をはたいた。初めて相方に怒りの感情が込み上げてきた。

「何するんだよ！」

おふざけではない、本気の威力で殴ってきた桃花に食

って掛かってきた。

「それで根本的に解決すると思ってるの？」

桃花が声を震わせながら言った。

「私たちという間は幸せかもしれないけど、いじめが終わるわけじゃないんだよ。あと一年も大切な人たちのために嘘をついて部活をしなきゃいけないんだよ！」

息継ぎをせずに怒鳴ったせいにか、呼吸が荒くなっていた。

「こっちは自分たちの意思でグループから離脱してるし、一人じゃないからいい。でも、珠美は違う。誰も頼れないんだよ」

呼吸を整えてさらに畳み掛ける。

「ジョブフェスの時は成功したから黙ってたけど、涼花つてさ、自分の理論を人に押し付けたがるよね！勉強も部活も上手くいつてるから弱者の気持ちなんて考えられなくなつたんじゃないの？」

「それは……関係ないでしょ」

急所を突かれたような気がして、涼花も反撃の体勢になった。

「私に不満があるなら、そっちから提案してきたことある？あの時だつて私が何もしなかつたら最後まであみること憐れんで、言葉だけの偽善者で終わりだつたんじゃないの？」

返り討ちを食らった。優しさや正義感があつても、行

動に移せない弱さがあるのは自分でも分かっていた。でも、何も解決策を考えていないわけじゃない。すぐに最適解が浮かばないだけ。それを理解してもらえていなかったことが、たまたまなくショックだった。

そこへ、事態に気づいた顧問が喧嘩を止めに来た。

「なあに、どうした？ うん。職員室で、ゆっくり話し合おうか。ね？」

どちらを責めることもなく、顧問の野田先生は優しく背中をさすりながらなだめた。すると涼花は我に返り、桃花の方を見た。彼女の温もりに緊張の糸が切れたのか、膝に顔を隠したまま泣いていた。まずいことをしてしまったと思ひ、すぐに目をそらした。

「皆さんはいつも通りのメニューで練習してください」
彼女はそう告げた後で二人を連れ出した。他の部員たちは会話をやめ、心配そうに三人の背中を目で追っていた。

職員室の隅にある、衝立で隔離されたスペースに案内された。いくつか長机が置かれている。面談なんかに使うのだろう。

「水分は摂った方がいい」

速足で台所に向かうと、よく冷えた麦茶を用意してくれた。二人はお礼を言ってから、半分ほど口にした。体

より先に頭が冷やされていった。

そのタイミングで、向かいに先生が腰を下ろした。

「双子みたいに仲がいいあなたたちが喧嘩だなんて、水筒にワサビでも仕込まれたのかいな？」

二人は弱々しく苦笑いした。元気づけるための冗談なのだろうが、状況も状況なのでぎこちなくなってしまうた。

「何で喧嘩しちゃったのさ？」

先生が前のめりになり、指を組んだ。

「方針の違いつていうか、何というか」

桃花が答えた。

「方針？ 何の？」

二人は顔を見合わせた。詳細を打ち明けないとらちが明かなそうだ。

「加賀さんのことで困ってて」

涼花が暴露した。

「加賀さん？ ああ、木ノ道中のね」

「いろいろあって、加賀さんが部活で仲間外れのいじめにあつてるところを知っちゃったんです」

「まあ、そんな……」

「どう解決するかの方針で対立して、こんな感じに……」

涼花はいたずらをして叱られた園児のように縮こまっていた。彼女らしくない自信のない態度だ。

「え！ あなたたちだけで解決しよう？」

二人の秘密を知らない彼女はトーンを上げた。衝立の向こうを歩いていた先生が思わず声の方を見た。

「協力者がいるにはいるんですけどね」

桃花が補足した。それを聞くと、彼女は背もたれに寄りかかって、「ふーん」と反応した。

「で、二人はどうしたかったのよ？」

本題へと誘導した。

「私は協力者とも話し合ったうえで、向こうを説得して和解を促せたらって方向に決めてました」

「うんうん」

特に反論する様子はなかった。

「そいで、涼花はどうしたかったんだい？」

体の向きを変えた。椅子の振動が机に伝わり、茶色い

麦茶の水面が揺らいだ。

「よそ者の私たちがほぼ初対面の相手を説得するのは非現実的なんじゃないかと思つて……」

ばつが悪そうに顧問の顔を窺った。

「だから、私たちが代わりの部員のな存在となつて、週末なんかは一緒に練習したり遊んだりして心を癒せば、辛い時間もそれを希望に乗り越えていけるようになるんじゃないかと思つて」

「ほー。さすが涼花だよ。具体的に考えてたんだねー」
すぐに否定しなかった彼女を見て、桃花はあつけにとられた。

「免疫みたいだなー」

「そんな感じ、でしょうかね」

「いかにも理系つて感じがするね」

ハハハ、と笑つた後、再び話を戻す。

「それで、どっちがどっちの案を気に食わないと思つたのかい？」

桃花が黙つて手を挙げた。

「涼花の自分勝手な提案が嫌だったんです」

先生の目をしっかりと見て言つた。

「これだといじめから解放されたことにならないじゃないですか。そうですよね、先生？」

「確かにね」

そして、さらに続ける。

「涼花が珠美の立場だったなら元々メンタルが強いし、これくらいのアプローチで十分なのかもしれないね」

「はい」

涼花は自分の意見に自信があるかのような口調で返事をした。

「でも、あなたと加賀さんは違う。人の立場になつて考えてみるつて言うよね」

そんなの知つてるよ、と涼花は思った。しかし、自分と珠美が違うということは、完全に同じ立場に立つて考えることはできないという意味にもなる。

「まあ、そうだよ。知つてはいても、難しいもんね」

黙り込んでしまった涼花を見て、別の例えを出すことにした。

「例えばさ、涼花だってある日突然桃花がいなくなったら、これまで通りに部活はできないんじゃないかい？」
「まっすぐに涼花を見つめた。珠美と翠の関係を連想させる酷な質問だった。」

涼花は他の部員のことを思い浮かべた。密接な関りはない。でも、あいさつは交わすし応援もされている。珠美ほどひどくはないと信じていた。

でも、思い込みかもしれない。実際グループに飛び込んでも、今更付き合い方が分からず一年孤立する可能性だってある。誰とも言葉を交わさず、大会では一人で弁当を食べ、会場を散歩して時間を潰す日々……本当に自分に耐えられるのか？ 考えるほどに、さつきまでの考えが馬鹿らしくなってきた。

「桃花」

涼花は彼女の方に向き直った。

「ごめん、ひどいこと言っちゃって。やっぱり和解が一番だよ！」

「私も、いきなりはたいたりしてごめんね。つい感情が爆発しちゃってさ」

一瞬で仲直りしてしまった。

「よかったよかった。」

顧問が声高らかに祝福した。

「ところで、具体的な作戦は決まってるのかい？」

「それがまだなんです」

桃花が真剣な面持ちで告げた。

「証拠とかはあるのかい？」

「協力者が木中の友達から情報収集をしてくれたみたいですよ。学年で噂になってることは分かりました……」

「ふむ。そこまで広がってるなら信憑性は高いね。でも、噂に過ぎないだろ？」

「ですよ……」

「本気で解決したいなら現行犯の証拠を押さえた方がいいと思うね」

「でも、どうやって？」

桃花が聞いた。

「やっぱり録音が簡単かねー」

「でも先生、盗聴って犯罪になりませんか？」

涼花が手を挙げながら質問した。

「涼花、実はね、罪にはならないんだよ」

他の先生に聞こえないように小声で教えた。

「録音はできるとして、どうやって相手サイドに潜入すればいいのでしょうか？」

桃花が心配そうに聞いた。

「そうだねえ……」

背もたれに寄りかかって少し考えていた。

「新人参考大会ならいけるかもしれない。木ノ道中も確

実に参加するし」

彼女が手を叩いた。

「個人の部は各校上位二人しか参加できないだろ？」

姿勢を整えながら念を押した。

「木ノ道中は二人抜けようと部員はたくさん席に残る。

近づきさえすれば証拠をキャッチできる可能性があるね」

「あー」

大胆なアイデアではあるものの、二人とも納得していた。野田先生はふいに席を立つと、自分の机に向かい、大会のしおりを一部持ってきた。そして、二人の前でバラバラとめくり、シングルのリーグ表を示した。

「ほら、加賀さんも代表になってるから、もちろん本人に計画を知られる心配もない」

二人は顔を近づけてそれをのぞき、頷いた。

「でも先生、私たちだって両方代表じゃないですか。あわよくば勝ち進めたらずっと客席に戻れませんよね？」

桃花が投げかけた。

「そうか、その可能性もあるねえ」

顧問は、しまった！ という風に目を覆った。

「こういう時こそ、協力者とやらを呼べないのかい？」

二人は、綾音が選考に落ちたと話していたのを思い出した。時期的に月乃もすでに夏休みに入っていることも。

「はい、二人います」

「よし。試合中の代理がいれば、一日張り込みができる」

顧問が頷いた。

「あなたたちには特別に、あらゆる道具の持ち込みを許します。もし他の先生に注意されたら、私のところに行くように言つて。その時はちゃんと訳を話してあげるからね」

「ありがとうございます！」

二人は息びつたりと言った。

「それにしても、あなたたちだけでなんて驚いたもんだね。中学生とはいえ十三、四年しか生きてない子供なんだから、もっと大人に助言を求めていのよ」

「すみません」

「謝ることじゃないよ。とても感心しました」

優しい口調だった。

「でもね、二人には各々未熟さがあるんだよな」

「未熟さ、ですか？」

顧問は二人の目を順番に見た。

「簡単に言えば短所ってだけなんだけどね」

そう言うときすぐに話し始めた。

「涼花はねえ、分析力があって自分の意見がはっきりしてる。だから何事にも動じない、勇気ある精神の持ち主なんだろうね」

涼花が控えめににこつとした。口角が上がっている。

「その分、自信過剰で頑固かもしれない。反発したり、自分の考えを正当化して、人に押し付けようとするこ

とかあつたりしない？」

「そうですね」

「気まずそうに答えた。隣では桃花が笑いをこらえていた。

「桃花はねえ、大人びてて慎重派。そして謙虚。洞察力もあつて人を思いやれる、優しさの塊って感じだよ」

「ありがとうございます！」

素直に喜びを表現した。

「だからこそ、変なことでできない、いい子でいなきやと思つて、なかなか意見を言えないことがあるんじゃない？」

「はい。自分の意見が間違つてたらつて思うと、怖くて。

考えすぎて答えにたどり着けないから、最終的に人に合わせちゃったり……」

「そうだよね。慎重だから決断が下せないだけで、何も考えてないわけじゃないんだよ。涼花はあれこれ迷わず決断が早いから、誤解しちやつたのかもしれないね」

桃花なりに苦勞していたことを知つて、胸が苦しくなつた。

「涼花は人の意見にじっくり耳を傾けた方がいい。そうすれば桃花も意見を言いやすくなる。二人のチームワークもよくなつてくんじやないかな」

結論が出された。

「アドバイスありがとうございます！」

二人はすっかり元通りだつた。

「よし、それじゃあ練習に戻りましょうか！」

顧問とともに立ち上がった。

その時、桃花はあることを思い出した。

「先生、一つだけ頼みたいことがあるのですが」

二人も立ち止まった。

「向こうの先生に、加賀さんがいじめられていることをやんわりと伝えてもらえませんか？ 大事になってほしくないから、加賀さんは苦しくても打ち明けられないんだと思うので」

本当の最短ルートは、珠美の代わりに自分たちが先生に伝えることだ。でも、部外者である自分たちの言うことを信じてもらえる可能性は低い。でも、代わりに他校とはいえ生徒を見るプロである顧問から伝えてもらえば、効果が期待できる気がした。

「分かった。部活の中だけで解決するように頼んでおきます」

難点はサポートしてもらえる。証拠集めに全力を尽くそうと心に決めた。

ブルーギルズは、張り込みの作戦を立てることにした。綾音も月乃も参加を承諾した。桃花と月乃は、大会のタイムテーブルを見ながら、姉妹会議をしていた。

「まずは大会に一切関係ない私が、何かしらの関係者のふりをして席を確保しに行く」と

月乃が開場とともに潜入、開会式で選手がいない間に拠点近くに場所取りをするという策略だ。

「ちよつと悪そうなフアッションして居座れば、荷物で取ったもう一席の譲りを乞われる心配なさそうだし」

月乃は高校のダンスで使ったサングラスをかけ、桃花に変なステップを見せた。会議の最中なのに、桃花も桃花で、ダンスに合わせてサビを口ずさんでいる。そして、ほどほどのところで動きを止めると、

「遊んでる場合じゃなかったね」

と言つて座った。

「で、今回はリーグ戦だから、私も涼花も初戦は式終了後すぐの九時スタート」

大会プログラムを指さした。桃花はロブロック、涼花はロブロック、珠美もロブロックで出場することになっている。

「勝敗は予測ついてる？」

「うーん。組み合わせ的に涼花と珠美は勝ち進めそうな気がするから、私メインで動くことになりそうかな」

「じゃあ最初私とサブで綾音が入って、試合終わり次第桃花がどちらかと交代つてことだね。休憩も必要だし」

「うん。そして珠美の悪口が出たら、録音ボタンをぼちつとな」

購入したボイスレコーダーを押すふりをした。決定がはかどっている。

「あ、でもこの前顔見られちゃったかもしれないだよ。危険人物と思われてたりして……」

夏体で逃げ出した時のことを思い出した。

「じゃあさ、桃花たちも変装すればいいんだよ！」

月乃が突然提案した。何してもオツケーなんだろう？と堂々とした態度である。

「服を変えるだけで印象はガラッと変わるもんだよ」

「ホントに？ すごい！」

「試合終わったら、桃花も涼花も観客になりきつちやえば分からなくなるよ。毎日会ってる相手じゃないんだから尚更」

「なんか本格的だね」

桃花は目を輝かせた。それを満足そうに眺めた後、早速月乃は張り切つて二人に合いそうな服を選び始めた。

桃花もウキウキして、一緒にクローゼットを漁り始めた。

桃花は鏡の前に立って、上から下まで目をやった。あまりの変わりように、鏡の中の人間を自分と思えず

「かわいいじゃん！」

と言つてしまった。大人物のワンピースを着たのは初めてだった。急遽呼び出された涼花もボーイッシュに決

めてポーズなんかとっていた。二人ともファッションには無頓着だったのに、月乃のサプライズですっかり目覚めかけている。

「綾音ちゃんは服いっぱい持つてるから大丈夫だよね」綾音もブルーギルズの存在は秘密にしているものの、二人と同じような許可を取ったらしい。

「じゃあ、綾音に着替え持つてくるように連絡しなきゃだね」

桃花は月乃からスマホをパスしてもらうと、綾音へのメッセージを送信した。四人による悪との戦いが始まるうとしていた。

「ただいまより、平成二十八年度、浜塚市中学校体育連盟……」

よく通る男性顧問の声で開会式が始まった。月乃はガラガラのお客様を歩き、木ノ道中の校章入りスクールバッグを見つけた。エナメルバッグではない学校もまれに存在する。とても都合がいい。

自分のカバンを置き、隣に腰を下ろした。白に英文字入りのシャツに黒のパンツ、髪は茶色に染め、例のサングラスをかけた月乃は、熱帯魚のようなユニフォームを着た選手たちに紛れてもよく目立つ。これなら三人も見失わないだろう。

しばらくの間、サングラスを外してリラックスしていた。正面の方にぎゅうぎゅうに座らされ、えさに群がる熱帯魚と化した選手たちを見て少々愉快な気分になっていた。あの子は強そう。一番後ろのあの子はやる気がなさそう。やっぱり男子より女子の方が姿勢がいい。勝手な想像を楽しんだ後で、桃花、涼花、そして綾音を探した。妹が選手として大会に出ることができ、彼女やその友達たちと出会いここへ戻ってこられたこと、そんな奇跡をかみしめ、瞳が熱くなるのを感じた。すると、涙で目が覚めたのか、我に返って周囲を見渡した。そして何事もなかったかのようにサングラスを装着し、首が痛くなりそうなほどに顔をかがめてスマホを操作した。変装はあくまで木ノ道中の集団に接近するためのものだが、四人のうち月乃は過剰に何かを恐れている様子だった。

開会式が終わると、体育着を着た選手だけがフロアから去っていった。綾音がチョウチョウオオのようなカラーリングの二人組に手を振り、小走りで戻っていく様子が見えた。

しばらくすると、私服に着替えた綾音が現れた。髪も下ろしていて、いつもと印象が変わっている。

「月乃ー。おまたせー」
いつもと違う、ため口で声をかける。

「もー。遅いんだから」

荷物をどかし、座らせた。二人は応援に来た卓球部以外の中学生という設定で動くことになっていた。髪を染めている月乃に関しては無理がある気もするが……しかし、隣のターゲットたちは特に不審がる様子もなかった。綾音は本来校則違反のスマホを持っているスリルに心を弾ませていた。そんな中で、釣りをするような気分が時が来るのを待った。耳は木ノ道中の方に傾けながら、二人の試合の様子も見守る。

「あーあ。あともう一回勝つてれば私も出られたのに」
部内試合が相当悔しかったのか、綾音はつい口にしてしまった。すると、一人がこちらの方を見た。彼女は言ってしまった後で、あっ！と思った。

「へー。テニス部も大変なんだね」

月乃がすかさずごまかし、その後

「ドンマイ！」

と小声で励ました。

その時、

「テニス部の△△、××と付き合ってるでしょ？ 実は

アイツ、二股してるらしいよ」

「うわー△△サイテーじゃん」

「××かわいそー」

二人の発言をおかずにしたのか、自校の噂をし始めた。顧問たちは本部席で職務に当たるとして不在なので、

客席は無法地帯になる。他の部員の様子を見ると、試合をするわけでもないのに栄養ゼリーに吸い付いている者もいれば、あれほど禁じられているのに、客席のガラス盤に手をつけて応援している者もいた。ひよっとして学校自体の治安が悪いのかと疑ってしまうほどだ。

かわいそーなのは珠美だ、いい加減にしる！ と言いたかった。関係のない悪口まで聞かされ、二人は不快だった。

決定的な証拠はまだ押さえられていない。だが、いじめを彷彿させるシーンはあった。珠美のブロックは月乃たちの目の前で試合をしていたが、誰一人応援している様子もなかった。代わりに、全員がその隣で行われているもう一人の方を応援していた。涼花と桃花は遠い位置からでも二手に分かれた部員に応援されていた。あまりのひどさに、月乃も綾音も木ノ道中の拠点に割り込んで珠美を応援する姿を見せつけてやりたいと思った。でも、今は辛抱の時だと思ふと、もどかしさを感じた。

結果、勝ち進めたのは応援していた方ではなく珠美だった。拠点は馬券を外したギャンブラーのようにピリピリしていた

「はあ、マジかよ」

さも不服そうな声が聞こえてきた。二人は顔を見合わせて頷き、スマホをともにムービーモードにセットした。「珠美だけおいしいとこ持ってきてやがって！ このハイ

エナ女が」

片手ピースで自撮りのふりをしながら、同時にボタンを押す。一瞬のスキを逃さなかった。

「できた？」

月乃が聞いた。綾音が確認した。しっかりと録音されていた。

「できた、みたい」

「よかった。私のも、予備ってことで」

小声で成功を喜び合った。

「でも、数があった方がいいよね」

再び試合に目を向けた。

αブロックもβブロックも、ほぼ同時に終了した。予想通り、桃花は敗退し、涼花は勝ち進んだ。

鈴蔵中の拠点に戻る途中で、二人はたまたま合流した。ひんやり薄暗い通路で、シューズの摩擦音が鋭く響く。

龍の咆哮にも似た鋭い掛け声の絶えぬフロアの裏世界に
来てしまったかのように、廊下は静かだ。

「おめでとう！」

「ありがとう」

涼花は照れ臭そうにしていた。

「私も、着替えてみんなの手伝いがしたかったな」
彼女は不本意そうにしていた。

「この前任せっぱなしだったから、今日は私が頑張るよ。
涼花は自分の試合に集中して」

「でも……」

「私は大丈夫だよ。ほら、ちゃんと休んで試合に備えな
いと熱中症で倒れちゃうぞ」

桃花はラケットを振って、うちわのように風を送った。

「全然風来ないよー」

「もー。そうかもしれないけど、冷たいな」

「ごめんごめん。もちろんうれしいよ」

笑って言うと、肩を組ませてきた。

「桃花と会えて本当によかったって思ってる。私だけだ
と、変な方向に突っ走ってやらかしそうだし」

ちよつと申し訳なさそうにしていた。

「私こそ、涼花が引っ張ってくれないと何していいかわ
からなくなっちゃうことあるし」

珍しくネガティブな発言をした彼女の不安を打ち消す
ような明るい口調で答えた。

「これからもよろしくね！」

二人は絆を再確認しあった。

荷物を置いた後、桃花はすぐに着替えた。上手く擬態
できているか心配だが、行動に移るしかなかった。エナ
メルから小銭入れを抜き取ってから再び廊下に出ると、

体育館の公衆電話から月乃に電話をかけた。

「お姉ちゃん、今から行く。そっちはどう？」

「了解。順調だよ」

桃花はすぐに電話を切ろうとした。

「待って！」

月乃が慌てて阻止した。寸でのところで受話器を耳に当てなおすと、そのまま急いで十円玉を追加した。

「みんな席離れて別行動始めるみたい。ここからは三人に分かれて各グループを見張った方がいい」

「とりあえず二階に上がって木中生を探せばいいってことだね」

「そう。くれぐれも気づかれないように」

「分かった」

受話器を置いた。消費されなかった硬貨をつかみ取り、ダッシュで階段を上った。

最初に見つけた女子二人組は、男子の応援をしていた。片方はユニフォーム姿。敗退して戻ってきた代表なのだろう。選手が得点すると拍手をしつつ、客席に残っている男子と会話を楽しんでいた。

「お前ら、加賀さんの応援行かなくていいのかよ」

案の定指摘されていた。

「誰かしらが応援してくれるだろうし、無人にはならないうっしょ」

後ろの席に座り、すぐにスイッチを入れる。なんとか

録音に間に合った。

「えー。いいのかよ？」

男子生徒も困った様子だった。やっぱり違和感に気づいていたのだろう。

「珠美はエースなんだから、そろって応援しなくなっちゃって変わらないよ」

「そういう問題じゃないだろ」

「文句あるの？ これ以上言ったら、宿題になってるコンクールに出す詩、代わりに考えてあげないからね。強制課題だから逃げられないよ」

「無理無理無理、俺絶対やだ。お願いしますよ」

とんでもない不正をしてやがる、創作を何だと思ってるんだ！ とカチンときた。こっちは本気でやってるんだぞ！ と言ってやりたかった。あまりにも気に入らなかつたのでついでに記録してしまった。こんな具合に、木ノ道中の女卓はどこまでも悪だった。

男子生徒の勝利を見届けると暇になったのか、再び移動を始めた。桃花は一度フロアを見下ろした。多くの選手が、ゼッケンをなびかせながら太刀捌きのようにラリーを繰り返している。そこでは涼花も珠美も試合を始めていた。カウンターを見るには、二人ともトーナメント一回戦は優勢と言えそうだ。まだまだ仕事は長引きそうだと言合を入れた。

と、行きたいところだったが、試合が終わってからも

動きっぱなしだったのでトイレに行きたくなった。ボイスレコーダーをしつかりとトートバッグに入れて向かった。女子トイレは相変わらず混雑していて、出てくるのにかかりかかってしまった。

通路に出てなんとなく左の方を見ると、先ほどの代表がいて、体育着の生徒に詰め寄っていた。見たことがない顔なので一年生なのかもしれない。ひよつとして先輩の逆鱗に触れることでもやったのか？ と、去年の涼花と重ね合わせて見ていた。

一体何をやらかしたんだ？ と興味を持ち、柱の陰から話を聞くことにした。

「ふーん。こんなもの持ってきて、お前いい度胸だね」
「……」

ツインテールの代表Bは後輩に何かを見せつけた。それを見て、桃花は血の気が引いた。

それは桃花とそっくりなデザインのボイスレコーダーだった。

後輩は真っ青になっていて、脚をビクビクさせていた。
「お前、珠美のこと尊敬してるの？」

「……はい」

「へー。ものづくり部の方ばかりか大事にしてる先輩、お前のことなんかこれっぽっちも可愛いと思ってるんだらうよ」

容赦なく攻撃した。その様子を録音しながら、どうす

るべきか迷っていた。

「ま、私を告発しようだなんて考えても無駄」

彼女は奪い取ったボイスレコーダーからSDカードを抜き取ると、シューズの裏で踏みつぶした。

「お前も珠美と同じ目に合わせてやろうか？」

マズいと思った。自分のせいでこれ以上被害者が出たと知ったら、珠美は心を痛めるに違いないだろうと。

涼花はいない。つまり今動けるのは自分しかない。そう考えると、もう迷いなどなく一気に飛び出した。

「！」

気づけば二人の間に割り込んで制止していた。いじめの二次被害を見過ごすなんて、自分の心が許さなかった。

「誰？」

彼女は一瞬困惑したが、ひるむ様子はなかった。そして、すかさず桃花をにらみつけた。

「あっ、あなた、さては鈴中の春山さんですよ？」

桃花は蛇ににらまれた蛙のように固まってしまった。

一瞬で正体を見抜かれてしまったのだから無理もない。

「珠美と何度も試合してくれてるもんだから、嫌でも覚えちゃいますよ。きれいごとばかり言ってるクソ顧問のせいでアイツの試合の応援させられて、こっちは迷惑

なんだけどねー」

顧問までも侮辱した。

「てゆーか、何その服、だっさ！」

一方的に話題を変えると、手を叩いて爆笑した。遠回しに自分の姉までいじめられているようで、悔しくて泣きたかった。しかも、よりによってこの場で「正義感はあるけど、何もできない」という涼花の指摘を思い出してしまった。誤解による発言だったとしても、そう思われていることには変わらないのだ。

その頃、涼花は二回戦に進んだもののストレート負けし、自分の弱さに打ちひしがれていた。敗者審判を終えると、普段はこのけしからん事態にすぐさま頭をフル回転させて敗因を解析し始めるところだが、今日は客席を見回した。桃花の姿が見えないことに、本能的に危機を感じた。

その瞬間、獲物を見つけた猛禽類が急降下を始めるように、まだ疲労の抜けきらない体でダッシュした。フロアのドアから出て、まず一階全体を見回ったがいらない。すかさず階段を駆け上がり、隅の方に花柄のワンピースと、木ノ道中のピンクのユニフォームを捉えた。

そこでは桃花もグルと思いきまれば、強引にカバンを探られて証拠隠滅されてしまった。それでも後輩をかばっている、完全に桃花に侮辱の矢が向けられた。今度は

涼花との試合結果の格差を散々に批判されているところだった。メンタルはもはや瀕死状態。もう駄目だと思つた瞬間、

「桃花に手を出すんじゃないえ！」

青と黒のユニフォームの選手が飛び込んできた。背中には汗が染みたままのゼッケン、「佐原」の文字。

「おっ、佐原さんが来たか！」

「涼花！」

桃花は思わず声を上げた。

剣幕とともに乱入してきた彼女に、ツインテールは一瞬圧倒された。

「卑怯ないじめをしておいて、関係ない人たちまで侮辱……外道だな！」

恐れを知らない目で睨みつけた。しかし、それを見ると彼女は手を叩いて笑い出した。

「何その言い方。ヒーローにでもなったつもり？ ウケる！」

一喝されても依然と偉そうな態度を取っている。「関わったら面倒くさい女子」というより、その振る舞いはヤンキーに近い。彼女の意外な反応に、気力を吸い取られた感覚に陥った。それでも涼花は簡単には折れなかった。

「もう他の生徒にも感づかれてる。何言っても無駄だと思っよう」

冷静に続けると、当の本人はポケットに手をつ突っ込んで

で、だるそうに聞いていた。

「そんな状態でも騒ぎにならない理由、どうせ分らないだろうね」

それを聞くと、

「私、平均点も取れないバカなので、分かりませーん！」
鼻で笑い、まじめに語る涼花をからかった。

「勉強ができなくてもこれだけは分かってなきやダメだよ！」

真向否定した。

「いじめを知ったら自分を大切に思ってくれる人も悲しむ。だから嘘をついてまで周りに悟られないようにしてきたんだよ。それをいいことに君は卑怯なことを……君は誰かを大切にしようなんて気持ち、一ミリも持ったことないんだろな！」

涼花はビシツと言った。彼女はしばらく何も返せなかった。その様子に、懲りてくれたと思った。だが、甘くはなかった。

「部外者のくせに、生意気な」

突如涼花の胸倉を掴んで言い放った。いい意味では勇氣ある行動、悪く言えば突発的で無謀な行動が、相手の逆上に繋がってしまったようだ。

「しぶといのは試合だけじゃなかったみたいね」

体で涼花をコンクリートの壁に押さえつけた後、ポケットのペンケースから器用にはさみを取り出した。だが、

これを余裕の消失による苦し紛れの抵抗とみて、涼花は暴れも叫びもしなかった。はさみの一つや二つ女子中学生が筆箱に入れていたっておかしくない。殺人を犯すつもりはないだろう、という分析だろうか？ 一方その後ろで、桃花は一年生をかばったまま縮こまっていることしかできなかった。いじめっ子はもちろん、ここまですて動じない涼花もまた恐ろしい存在で、熊に遭遇したかのように生きた心地がしなかった。

「飲み物おごってあげるよ。二人には内緒だぞ」

その時、月乃と綾音が重いドアを推して通路に出た。

「えっ？」

少し離れたところに、身動きが取れず、はさみを突き付けられた涼花と、なすすべなくしやがみこんで震えている桃花が見えた。

「綾音ちゃん、鈴蔵中と木ノ道中の顧問を呼んできて！

ここは私が何とかするから！」

「はい！」

彼女はダッシュで階段を降りて行った。月乃がサングラスを装備し直し、木ノ道中生を引きはがすために近づくようにした時だった。

「分かった。はさみはしまつて。その代わり私を言葉のサンドバックにしていい。たとえ珠美に不満があつての

いじめだったとしても、許されることじゃない。仲間でもなんでもない私にぶつけろ！」

心を動かされたのか、ツインテールは涼花から離れた。それを見て、月乃は物陰に隠れた。そう、自分はただの助っ人。基本的には二人の脚代わりに過ぎない。もう一人の妹のような涼花が諦めずに戦おうとする姿を見て、止めに入るのを辞めた。

涼花は他の選手に対して少し敵しいんじゃないか。桃花はそう思い込んでいた。でも、間違いだつたと気づいた。弱者を守めることは正義だけど、悪に打ち勝つこともまた正義じゃないか。つまり、ブルーギルズに必要なのは優しさで勇気。優しさを持っているのが自分で、勇気を持っているのが涼花。勇気、それは時に悪に打ち勝つための自分の武器であり、時に壁にぶつかってくじけそうになった者に授ける武器にもなる。自分が非難したあの時みたいに、弱者を甘やかさず立ち上がらせるのも一つのやり方。自分こそ正義に対する価値観を涼花に押し付けていたことに気づいた。

「く、悔しかったんだよ！」
ついに口を開いた。

「珠美ってロボットのプロみたいな人でさ、表彰ばっかりされるし、色んな先生にちやほやされてて……テレビにまで出たことあるんだよ」

涼花も桃花も、黙って耳を傾けた。

「おかげで練習試合行っても珠美だけ有名人扱い。私は見向きもされない。いないようなもの。だから、だから、何とか陥れて下剋上してやろうと思ったのよ！」

本音を絞り出した。握力を計る時みたいに拳を握り、言葉のサンドバックと化した涼花に本当に殴りかかってきそうだ。

「それが君の選んだ珠美へのリベンジだつたんだな？
答えだつたんだな？」

涼花は静かに問い詰めた。

「私にはこんなことしかできないんだよ」

投げやりな態度。しかし、彼女の目に邪悪さはなくどこか悲しげだつた。そんな様子に涼花は何かを悟った様子だつた。

「地道に努力して目立つことを諦めたから、いじめで不登校にして不戦勝しようと思つたんだろ！」

彼女は自分自身に対する貧困、つまりは取り柄がないという劣等感に苛まれてきたのだろう。中学生になって部活に入ることで、そこから解放されるチャンスを得ることを期待していたのかもしれない。けれども、ものづくり部だけにいけば十分といえる珠美が、おまけ的に自分の部活にもいる。そのせいでどれだけ頑張っても珠美の存在に吸収され、自分の存在が脅かされているように感じ始めたのだろう。本来なら対抗できる能力を磨いて自分の道を開拓しなければならなかったはずが、手っ取

り早い卑怯な戦い方を選んでしまったという具合だろう。話を聞いてみたら、いくらかいじめっ子に同情できる気もしてきた。

「間違った戦い方をしたのは悪い。でも、その気持ちは私にも分かる。頑張ってるのに、輝かしい結果がないと見向きもされないって寂しいよね」

涼花の言葉を聞くと、彼女は体の力を抜いた。

「でしよでしょ！」

話を聞いてもらえたのが嬉しかったのか、急に馴れ馴れしい態度を見せてきた。

「で、あんたはどんな体験したんだよ？」

ツインテールはドカンと涼花の肩に肘をかけた。

「えっと、あまり話したくないな」

彼女の期待に反して、拒んでしまった。桃花はこれに驚いた。本当に話したくないことがあるのか、とりあえず話を合わせたボロが出たのか、真相は分からなかった。

「なんだよ。ずるいぞ」

少しキレ気味に言った。

「……まあ、しょうがないか。誰だつて話したくないことの一つや二つあるもんだし」

少しでも自分に寄り添ってもらえたことで落ち着いたのか、無理に詮索するのを諦めた様子だった。

涼花は考えた。珠美へのいじめを解決するだけでなく、もつと大事なことがあると。優れた者の存在に心を乱さ

ず、自分と他人の人生は違うと妥協しながら歩めるように導いていかなければならないと思つた。

「部活のことはしようがない。でも、視野を広げれば他の道があるんじゃないかな？　なんか趣味とか特技とかない？　珠美にはなさそうなもの」

「思いつかないな。自己紹介とかでも、特になしって書いちゃうし」

あまりの自己肯定感の低さに、涼花は途方に暮れてしまった。無理して余計なことを言ったら、また桃花に批判されてしまうかもしれない。なので、さりげなく助けを求めることにした。というわけで、桃花の方をちらつと見た。

「えつ、私？」

突然すぎる。戦略的撤退とか聞いていない。なんて言つてあげようか考えていると、あることを思い出した。

「ねえ、さつき証拠集めてたら聞いたんだけど、宿題の詩を代わりに書いてあげるみたいな話してたよね？」

嫌がる人が多い宿題なのに、あんな余裕がある。桃花はそこに光を見出した。

「私、言つたかも」

自信なさげに手を挙げた。

「そういうの得意なの？」

「べ、別に、上手いわけじゃないよ。ただ楽しいからやつてるだけ」

特技として認識していない様子だった。

「上手くなくなつたつていいんだよ。ね、お姉ちゃん」

唐突な呼び出しに、月乃は心臓が口から飛び出そうになった。気づかれていたとは思っていなかった。

「お姉ちゃん？」

彼女はあたりを見回した。

「どうも。桃花の姉の月乃です」

仕方がないので、柱の陰からぬるつと体を出しサングラスを外して顔を合わせた。それを見て、ツインテールはポカンとしていた。

「で、私は何の話をすればいいの？」

「ほら、サークルの話だよ」

合点がいった様子だった。

「君が求めているのつて、スターになって目立ちたいつていうよりは、単純に誰かに認められ、必要とされたい、居場所がほしいつてことだろ？」

活気のない目つきで頷いた。

「私、大学で文藝サークル入つてゐるんだ。ちょうど今、地域の子供と創作を通して交流してみないかつて提案が出てゐるんだよ」

月乃の意外な正体を知つて、一番驚いてゐたのは涼花だった。

「月乃さん、国語専修なのは知つてたけど、サークルまでそれっぽい感じなんだね」

桃花の耳元で言つた。

「うん。高校からずつと文藝部なんだよ。私もお姉ちゃんの影響受けて、たまに創作とかしてゐるんだ」

「へー」

一年付き合つていても、まだまだ知らないことが出てくるもんなんだと思つた。

「君も、特別枠としてうちのサークルで活動してみないかい？ 部員が作品のいいところを教えてくれるから、自分に自信が持てるようになると思ふんだ」

すぐには返事をしなかつたものの、やがて口を開いた。

「はい、私、やつてみたいです！」

今度はピンと手を挙げた。

「そうとなれば、決まりだな！」

月乃は嬉しそつだった。

「えつと、名前は？」

「見川蒼葉です」

「蒼葉ちゃん……よろしくね」

月乃が笑顔で語りかけた。

「困つたら私もサポートするよ」

桃花も少し得意げに言つた。

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

彼女の瞳は若葉のように瑞々しく輝いてゐた。

その時だった。

「先生連れてきました！」

綾音が戻ってきた。二校の顧問が後ろに続いている。

「話は聞きました。一体どういうことですか？」

若い女性顧問がすかさず感情的に詰め寄った。

「工藤先生、自分を強要しては真実を隠そうとしてしまいます。ここは冷静に生徒の心に寄り添ってあげるべきです」

「野田先生……」

鈴藏中の顧問が熟練のフォローを見せた。すると、興奮していた彼女は一度深呼吸をした。

「このあと全員で話し合いをします。しっかりと聞いてあげますから、どうしてこんなことをしてしまったのか正直に話してください」

「すみませんでした。全部話します」

素直に罪を認めた様子だった。これなら証拠を提出する必要もなさそうだ。

「誰に謝ってるんですか？ あなたが謝るべきなのは先生じゃなくて加賀さんですよね！」

鈴藏中の顧問、野田先生が、かつて涼花を叱った時のように容赦なく言いつけた。厳しい時には誰に対しても厳しい。要するに愛の鞭なのだ。

他の選手たちが野次馬をしている中、彼女は顧問に連れられて去っていった。テレビに映った犯人のように俯いていたが、足取りはしっかりとしていた。春山姉妹の機転によって自分の生きる世界を見つげられたからなの

かもしれない。

「あの……色々ありがとうございます」

木ノ道中の一年生が顧問とブルーギルズの間ひよっこり入ってきた。

「いえいえ。でも一人で証拠を集めるなんて、なんでそんな無茶なことしたんですか？」

野田先生が聞いた。

「実は私、加賀先輩に恩返しがしたくて……」

彼女はもじもじしながら言った。

「小学二年生のころ、池で溺れかけたところを先輩が助けてくれたんです」

水草の先端に止まったトンボを捕まえようとして、足を滑らせたらしい。一人でこっそり忍び込んでいたため助けを呼びに行ってくれる人がおらず、誰にも気づかれない孤独を感じたまま沈んでいくところだったという。

「もうだめだ、と思ったとき、誰かがなわとびを投げ込んでくれたんです。そうです！ それが先輩だったんです」

うっとりしながら話していた。

「ありがとう」

後輩はそうお礼をすることしかできなかった。それに対して

「お礼なんていらぬよ。困ってる二年生を助けるのが私の仕事だから」

縄跳びを束ね、後輩の名前とクラスの書かれたかばんを見ながら、随分のんきなことを言っていたらしい。後輩もそばに落ちていた珠美のかばんを盗み見して名前を覚え、帰ってからノートにしつかりとメモしていた。いつか再会できたときに、恩返しできるようにと。

「同じ部活に先輩がいると知って、すごくうれしかったんです。でも、あの時と違っていじめられて、私の知っているキラキラした先輩なんかじゃなかった……」

聞いていた全員が暗い表情になる。

「先輩がいじめの海に溺れそうになってるのを見て、私がかんとかしなきゃって思ってたんです。でも、池に落ちるようなあほだから、失敗しちゃいましたね」

苦笑いした。

「ちよつと言いかも悪いかもだけど、君が失敗したおかげで私も踏み込めたわけだし。お手柄だよ！」

桃花が励ました。思い返せば、証拠を集めて提出するよりも上手く収まった気がする。

「おとりって感じか……これも、私の役割だったってことですかね。お役に立ててよかったです！」

後輩は嬉しそうにしていた。再びお礼を言うと、足早に拠点に戻っていった。

「何より二人が無事でよかった。袴塚さんから、刃物を突き付けられて人質にとられてるって聞いたもんだから」
顧問は安堵したのか、二人を優しく包み込んだ。

「心配かけてすみませんでした」

二人で謝った。

「だから、謝ることじゃありません」

ゆっくりと言った。

「てか綾音！ 話盛りすぎっしょ！」

涼花が怒鳴った。

「げっ！ ええと、緊急事態感出したくっつてさ」

「コラー、やりすぎなんじゃ！」

綾音と、顧問を振り切って飛び出した涼花の追いかけてが始まった。綾音はあつという間に捕まってしまった。

「もー。ブルーギルの共食いはやめんかい」

二人ともちよつと楽しそうにしていた。こんな幼稚なやり取りを、通りすがりの男子生徒たちが害虫を見るような目でチラ見した。

「すみません。妹たちが大事にしてしまっつて」

月乃が顧問に謝罪した。

「いえいえ、とても頼もしいいい子たちですよ。ていうか、桃花のお姉さんだったんですね。初めまして」

握手を交わした。

「ところで、袴塚さんは二人とどういう関係なのかしら？」

綾音は涼花と顔を見合わせた。なんと教えるべきか迷った。少し間をおいて、頷いた。

「塾の知り合いってだけですよ」

ブルーギルズの存在は内緒にしておくことにした。

「学校を超えた絆、素敵ね。これからも仲良くね」

三人は照れ笑いをした。

「さ、仕事も終わったことだし、みんな着替えてらっしゃい」

試合はとつくに終わってしまったが、やっというものの大会に戻った。

その後、会場の片隅でミーティングが行われた。蒼葉が黒幕で、その他は軽い洗脳状態で加担してしまったとのことだった。蒼葉は自分の心の狭さを反省し、仲のいい元の部活に戻したいという意思を示したため、話が大きくなることもなくあつという間に片付いてしまった。

顧問も自分の指導方法を改めた。いじめの原因が生徒の自己肯定感の低さにあつたこと。防げたのは自分しかいなかったこと。他人と比較して自分自身を悲観し、間違った生き方に突き進むことなく安心して生きることのできる環境を構築しなければならぬと学んだ。

「終わった宿題ある人は見せに来てください！」
夏休みの残りの期間、「学習会」という名目で練習後に

空き教室を借りて顧問と生徒の交流の場を作った。もちろん、勉強と関係ない相談を持ち掛けてもオッケーというルールで。部員たちは無駄話もしつつ宿題を進めていた。中には、珠美がものづくり部の部室から連れてきたネモフィラを膝に置いて撫でている者もいた。

「へー、家庭科の宿題で一汁三菜全部作ったのか。これなら今日から一人暮らししても平気だね。先生は学生の頃ほとんど自炊しなかったなあ」

「えー！ 意外ですね」

お世辞と思われぬように、より具体的に、時間をかけて向き合うように心がけた。

「先生、文芸コンクールの宿題終わりました！」

そこへ、蒼葉が自信満々に歩み出た。

「詩に短歌に俳句、たくさん挑戦したんだね。先生が読んでもいいかな？」

「あなたにも関心がある」ということを、自然に伝えた。

「いいですよ」

ちよつと恥ずかしそうにしながらも、許可した。

「うん。中学生らしい素直な表現。すばらしい！ 選ばれるといいね」

目をみてしっかりと感想を伝えた。

「ありがとうございます！ 実は私、大学生のサークルに参加させてもらって、がつつり鍛えたんですよ！」

それに反応したのか、珠美が寄ってきた。

「それって、どこの大学？」

「珠美のお父さんのいる浜塚大学だよ。春山さんのお姉さんが文藝部員で、そこに参加させてもらったんだ」

「うそー。私も月乃さんと知り合いなんだよ」

「マジで？」

ライバル視していたことも忘れて、共通の話題で盛り上がった。

「……もしかして、珠美も文藝部が気になってるの？」

心配そうに聞いた。もし入ってきたら、そこでも才能を発揮してしまうのではないかと恐れていた。

「ううん。がつつり理系だから、そういうの苦手なんだよね。蒼葉には叶わないよ」

珠美は自ら退いた。二人は同じ部活にいるけど、全く違う人間で、生きている世界も違うのだ。

部員と別れた後、ネモフィラを抱えて寄り道しながら帰った。あの時と同じ川沿いの小道。生い茂る雑草の中にはしぼんだツクサが点々と見え、空中を時々蝶や蜂が横切っていく。

蒼葉が、ブルーギルズにいじめのことを知られて説得されたと言っていた。彼女たちに自分の秘密を打ち明けたわけでもないのに、なぜ分かったのか謎だった。考え

つつ歩いてみると、ネモフィラが川の方を向いて突然鳴き始めた。

「どうしたの？」

首の向いている方に目をやると、岩の上に一羽のカワセミがいた。

そのカワセミは周りを警戒する様子もなく、羽を丁寧に整えていた。その姿は、慎重に慎重に刺繍を施していく翠によく似ていた。ネモフィラはそれを見ると、尻尾を振った。そして、

「キュ、ルー」

と言った。

「翠、なの？」

この独特なリズムは、翠を呼ぶときのものと一致していた。珠美は片手をフェンスにかけ、頭を乗り出した。

「翠ちゃん！」

思いつきり叫んだ。すると、カワセミは飛び立ってしまった。無機質な灰色の塊だけが残された。

「やっぱり違ったか」

がっかりしてうつむいた。転生とかありえない。そう思った時だった。

「キュ、ルー！」

ネモフィラが再び声をあげ、腕の中でばたつきだした。今度は首を左の方に向けていた。

「翠ちゃん？」

左を見ると、フェンスに止まっていた。その距離三十センチ、野鳥の距離感とは思えなかった。

目を合わせても、逃げる様子はなかった。彼女に違いない、そんな気がした。

「私がいじめられてたこと、もしかしてあの日、翠ちゃんがブルーギルズに教えたの？」

カワセミは瞳を閉じると、わずかに首を下へ傾けた。親友はすべて分かっていたのだろう。だから、学校の関係者に助けを求めずに、彼女たちに託したのかもしれない。

「翠ちゃん、ありがとうね。ちゃんと叶えてくれたし、私もみんなと上手くやれてるよ。前よりずっと仲良くなっただ」

「キュー」

ネモフィラもカワセミに向かって一鳴きした。胸のライトがピンク色に点滅した。

「もう、私のことで心配しなくて大丈夫だよ」

カワセミはネモフィラのライトを見ると、静かに飛び立った。珠美の頭上を一周すると、翠の家がある方へ飛んでいった。

「さあ、私たちも帰ろうか。今日はお父さんの誕生日だから、お母さんと一緒にハンバーグ作るんだ」

「キュー」

ネモフィラが、自分も手伝いたそうに返事をした。

「だめよー。水分油分で壊れちゃうかもしれないし」

もう親に隠すこともない。だから犠牲にしてしまった家族との時間を取り戻していくことにした。

綾音の例の友人によって女卓の関係性が回復したという情報を得たブルーギルズも、平穏な夏休みを取り戻した。四人で集まる時間を作ろうと、レストランで女子会をしていた時だった。

「今日は、私からみんなにビッグなお知らせがあります」
月乃と桃花が突然話を持ち出した。

「なにになに？」

涼花と綾音は食事の手を止めた。涼花は待ちきれないのか、脚を揺すっていた。

「加賀珠美、見川蒼葉がブルーギルズに加わることにまりました。イエーイ！」

月乃がカミングアウトした横で桃花が拍手を始めた。

「一気に二人も？ にぎやかになるな」

涼花が言った。

「どんな仕事をするんですか？」

綾音が聞いた。

「広報係だよ。蒼葉が活動の結果をまとめる文章を書いて、それをもとに機械いじりの得意な珠美がホームページ制作する感じ」

「すごい！ たがいの持ち味を生かしあってる」

涼花が目を輝かせていた。

「二人がさ、ブルーギルズはいいことしてるんだから、もつと外部に存在をアピールしないともったいないって話してたんだよね」

桃花が補足した。

「本格的な宣伝はそっちに任せて、綾音ちゃんはこれまで通り私たちや木ノ道支部への情報伝達に集中すればいいからね」

月乃がアドバイスをした。

「はい。引き続き頑張ります！」

気合の籠った返事をした。

「涼花、私たちも蒼葉が執筆に困らないようにベストを尽くさなきゃね」

桃花が背中を押した。

「そうだね」

「お姉ちゃんも、忙しいのにもいつも送迎してくれてありがとう！」

「いえいえ。私こそみんなと一緒に活動できてうれしいよ」

ガッツポーズをして見せた。全員に役割があつてそれぞれの色に輝いていた。さつきまで降っていた雨はいつの間にかあがり、窓の向こうには虹がかかっていた。そして、蒸し暑い空気の中でミンミンゼミに変ってヒグラ

シが鳴き始めていた。秋への移り変わりを感じさせる夕方だった。

「引退まで、みんなで頑張ろうね！」

「おー！」

四人で絆を確かめ合った。

それから数か月後、ブルーギルズは依頼が来たり来なかったりを繰り返していたが、ある週末に練習試合で木ノ道中を訪れた。

「珠美ー、久しぶり！」

二人は珠美と再会し、三人で弁当を食べていた。その間、おにぎりを片手に彼女からホームページのデザイン案を見せてもらっていた。場所は彼女が勧めてきた中庭で、他の部員は誰もおらず、まるで秘密基地のようだった。なんでも孤立していた時はここを食事の拠点にしていたのだから。真冬の裸になった木々に囲まれていて、今はともかく夏は虫が出そうな雰囲気だった。実際、珠美は蚊に刺されまくったらしく、家では親に怪しまれないように、薬を塗るのも我慢してしまっていたらしい。日の当たらない北側には、目的が定かでない放置された

池もあつた。おそらくそこが蚊の繁殖地だったのだろう。涼花はそれに気づくと、無意識に脛を掻いた。

「そういえば、今日なんで蒼葉いないの？」

桃花が聞いた。現に珠美が持つているノートの切れ端も、彼女から預かっているものだった。

「そうそう。夏休みの作品が入賞してき、短歌だっけな？」

それで今表彰式に行つてゐるんだよ！ まあ今日は一日練だから、午後には戻つて来られるつて言つてたよ

あたかも自分のことかのように目を輝かせていた。

「え、ホント？ どんな作品なんだつて？」

知りたがり涼花がお茶で口の中の米を急いで流し込んだ後で聞いた。

「ちよ、それは本人から聞いてよー。私が教えたら、『珠美が言いふらかした』つて怒ると思うんだよね。ま、強いて言うなら夏祭りのことを題材にしたらしいよ」

彼女はまだ自分に誇りを持っていないのだろう。

「そんなあ。選ばれるだけの実力あるんだから、もつと自信持つてもいいのにね」

涼花と桃花は顔を見合せて笑つた。珠美も、やれやれという素振りを見せた。

「へっくしゅん！」

風邪ひいたかな？ とつぶやくと、エアコンの効いた

車内で、蒼葉は学校指定のウインドブレーカーを羽織つた。窓の外では木枯らしが鳴き、無数の枯れ葉が飛び交つている。足元には部活用の鞆、隣の座席には賞状の入つた筒、両親の送迎で練習試合に向かつていたところだつた。今日は土曜で昼間の県道は混んでいた。

「ちつ、全然進まねえな」

「ほんと。どうしちゃつたのかしら？」

前方の両親が不機嫌そうにしていた。そんな中、彼女は退屈しのぎにもらつた作品集を開き、過去の最優秀作品を眺めていた。なんてラッキーなのだろうと思つた。

「えっ!？」

ゆっくりと眺めていた蒼葉だったが、急に声を上げた。

「どうした？」

父親が驚いて振り返ると、ブレーキから足が離れてしまい、クリープ現象で車がゆっくりと動き出した。

「お父さん、ブレーキブレーキ！」

母が声を荒らげたため前方車輛への追突は免れた。

「もー蒼葉、驚かすなよ」

父親は一気に疲れてしまった様子だった。

「一体どうしたつていうのよ？」

母はルームミラーをちらりと覗いた。

「ううん。なんでもない」

蒼葉は冊子を閉じると窓の外を見た。車は進路を変えて途中のコンビニの駐車場を横切り脇道に入り込んだ結

果、スムーズに進むことができた。

「蒼葉、もうすぐ着くから降りる準備しておけ。もらったものは下ろしておくから、椅子の上に置いてってくれればいいよ」

父親が正面に集中したまま促した。

「うん」

彼女は冊子を筒の下に置こうとしたが、何を思ったのか軽く丸めて鞆の中に放り込んだ。

その頃、三人は休憩時間を終え、各々申し込み試合に没頭していた。ひとたび試合を始めてしまえば、ブルースギルズだって練習に熱心なごく普通の部員としてその場の空気に溶け込んでしまう。

そんな空気の中で、誰にも気づかれないことなく制服姿の蒼葉が体育館に走りこんできた。そして、顧問に一声かけて荷物を置くと、ユニフォームを抱えて再び外へ出て行こうとした。

「パーン！」

「ラッキー！」

ちようどその時、相手のスマッシュはオーバーし、桃花が喜びを声にした。白球は流星のごとく飛んで行ったかと思うと、やがて勢いを失って蒼葉の前に落ちた。普段の癖か、反射的に拾った。さらさら軽い、大会用プラ

スティック球の感触が氷枕のような冷感ともに肌に伝わってきた。すると、かがめた腰を起こそうとするより先に活気のある足音が近づき、彼女の前でぴたりと止まった。

「蒼葉じゃん！　ありがとう」

そこには、手を差し出してボールを受け取ろうとする桃花の姿があった。それなりに疲労が蓄積していたのか、肩で息をしているかのように見えたが、表情は穏やかで勝負への緊迫感が感じられなかった。

「……」

「蒼葉？」

彼女はむすつと口をへの字にし、目を反らしながらボールをパスした。そして、急いで着替えに向かつてしまった。その足取りは逃げているというより、なんとなくぎくしゃくしていて、緊張を隠しているかのように見えた。この有様に、桃花は試合相手が待っていることも忘れ、豆鉄砲を食らった鳩のような顔で立ちすくんでしまった。

その後も蒼葉といったら、時折桃花の方を見て、気づかれては目を反らして知らんぷりを繰り返していた。その一方で涼花とは何事もなく試合をしていたので、なんだかくすぐったくなってきた。途中から涼花に呼ばれて二人の審判を務めたが、どうにも集中できずレットの見

逃しを指摘されてしまった。

「ねえ、涼花、ちよつと来い……」

試合が終わると、蒼葉は半ば強引に涼花の腕を引っ張って隅の方へ行ってしまった。桃花はスパイをしようと二人に忍び寄ろうとしたが、別の選手に試合を申し込まれ、泣く泣く離脱した。

「ねえ、話って何さ？」

詰め放題セールに参加している主婦のように試合を続けていないと気が済まない涼花は、ストレッチで気を紛らわせながら訊ねた。

「実はさー、桃花のやばい秘密知っちゃったんすよね。見たいっすか？」

週刊誌のカメラマンにでもなったかのようなセリフ。その演技のうまさに、涼花は圧倒された。

「見たいっす」

彼女は自分の鞆から作品集を取り出すと、折り目を付けておいたページを一瞬で開いてみせた。

「何これ？ ひらがな多くて絵本の文章みたいだけど……」

その冊子が何なのかの説明も受けていなかったもので、それが作品だともすぐには理解できなかった。

「あ、もしかして、桃花が昔書いた詩だったり？」

「ピンゴ！」

蒼葉はニヤツと歯を見せた。

「ちよつと、これ最高賞じゃん！ しかも、月乃さんのことだよ、この内容」

そこにはこう書かれていた。

えいゆう

稲切小三年 春山桃花

私のお姉ちゃん

強くてかっこいい

自まんのお姉ちゃん

真っ赤なラケットみたいなの

ゆう気を心にともして

ゆっくり向かうは真っ青な台

しよりりをとらえるキバは

真っ白なピンポン球

かれいに決める一げきひつさつ

とどめの一ふり

ひとみに宿る自信

お姉ちゃんは

月にほえるおおかみのように

しよりのおたけびをあげた

「桃花、本当に月乃さんのことが大好きなんだなあ。それに、月乃さんが試合してるとこ、きつとかつこよかつたんだろな。」

涼花は作品が作られた背景に着目していた。

「ノーノーノー」

「えっ、何？」

蒼葉は何か言いたそうだった。

「もー、作品の良さが分かってないじゃないか。まず、二連目。『ゆう気』と『ゆっくり』で韻を踏んでるでしょ？それに色が並べられてるとこ！小三でここまでテクニクを意識して書けるなんてたいしたもんだよー……」

小鳥の雛のようにピーチクパーチク語っていて、あまりにも話が長かったために涼花はあきれてしまった。更生はしたものの、月乃のサークルで面倒くさい能力を手にしてしまったのだろう。

彼女はまだまだ語っていたが、背後に誰かが現れた。その誰かは涼花の方を見ると、片手で「静かに」のジェスチャーをとった。それなので、平静を保ちつつウインクで「OK」の合図を送った。

「見川さん、試合お願いします」

隠れて噂話してたことくらい読めてますよ！ という

風な態度で言うと、脇の下に両手をつつこんで蒼葉をくすぐり倒した。

「何を話してたのかなー？」

さらにくすぐりのペースを上げたため釣り上げられた魚のごとくワヒワヒ騒いでいたが、これでは話にならないので数秒ほどで解放してやった。

「実はさ……」

ページを開いたまま作品集を手渡した。

「ああ、これか。見つかっちゃったな」

家族との将棋で詰みに気づいたときのように、苦笑いをしながら頭を掻くと、二人の隣に腰を下ろした。

「書いたのはお姉ちゃんが引退した夏休みんだけど、卓球してたかっこいい姿をいつまでも残したいって思いで作品にしちやっただよな。お姉ちゃんもすごく喜んでたし嬉しかったんだ」

「へー」

初めて明かされる秘密に、二人は耳だけでなく、体まで傾けていた。

「でも、こんなすごいことなのに、どうしていままで黙ってたの？」

涼花が聞いた。

「そうだよ。友達なんだから教えてくれてもよかったのに……私これ聞いても受賞を妬んだりなんかしないしよ」

蒼葉も答えた。それを見て、（お前が言うことか？）と

いう風に、涼花が肘で肩をポンとつついた。桃花はそれを見て笑うと、

「選ばれようと思つてこの詩を書いたわけじゃない。あくまで大好きなお姉ちゃんを表しただけだから他の人に受賞を明かす必要はないなつて思つてさ」

桃花の瞳は、穢れのない赤子のように清くまばゆい光に満ちていた。

「もー、お前つてやつは、本当にいいやつだなー」

蒼葉はいきなり桃花に抱き着いた。

「やめ、苦しいじゃないか」

なんとか振りほどき、ウインドブレーカーの襟の乱れを整えた。生地がこすれ、シヤカシヤカともゴソゴソともいえない奇怪な音を織りなした。

「あ。でも、ずっと引つかかつたことがあつたんだよね」

「あ、何？」

振りほどかれてひっくり返り隣の涼花にもたれかかっていた蒼葉が、むくりと体を起こした。

「この詩を書いた前後で、なんかお姉ちゃんの様子がおかしかったんだよね」

膝の上で頬杖をした。

「どういうこと？」

涼花が首を傾げた。

「三年生になつたくらいからどこか表情が陰しくなつて、

優しかったのに私にきつく当たることもあつたんだ。でも、引退したあたりから急に元に戻つたんだよね」

「なーんだ。きつと最後の大会でピリピリしてただけじゃないの？」

「うーん。蒼葉の言う通りでもあるかもしれないんだけど、もつとおかしなところがあつたんだ」

「何？」

「その後すっかり卓球に興味なくなつちやつて、テレビで試合やつても見向きもしないし、道具も押入れにしまつちやつてた。受験勉強に集中したいだけなのかな？ つて思つてただけど、結局高校も卓球部じゃなかったし、球技大会も違う種目を選んでた。嫌いになつちやつたのかな……？」

つま先にギュッと力を入れていた。

「だとすると、変化の原因は卓球にある可能性が高そうだね。それに詩との関係性も気になるな……もしかして、珠美みたいなことが月乃さんにも……」

涼花は桃花に聞こえるか聞こえないかのギリギリの音量で呟いた。

「違う！ 私が感じたのは何か、もつと違う気配っていうか……けど、これかもつていう心当たりは……」

彼女のささやきを聞き逃さなかった。

「そうなのか。桃花にも全く感情が読み取れないって珍しいね」

「うん。お姉ちゃんはクールな方だし、隙もないからね。ちよつと涼花に近いかも」

そう言われると、涼花はどこか嬉しそうにしていた。

「月乃さんと部活の話をしたことって、もしかしてそんなになかったり？」

蒼葉が訊ねた。

「そうなんだ。当時は私自身が部活のことにあまり興味なかったっていうのもあるし……今は今でお互い忙しいから余計にね」

「それじゃあ、珠美のときみたいに意図的に話を避けるのか分らないね」

涼花が言った。

「原因が部活にあるっていう涼花の仮説が正しかったとしたら、卓球部員の私たちにどこまでも尽くしてくれるのは矛盾してる気がするし、なんか腑に落ちないよね。ああ、もう！ お姉ちゃんの考えてることって本当に分からなからんだから！」

横で蒼葉が頷いていた。

そこに、試合を終えた珠美が、タオルを振り回しながら入ってきた。

「……へえ、月乃さんの秘密かあ。確かに気になるな。オオカミなんて表現されて喜んでたことは、卓球して

る自分にも誇りを持ってただろうに……完全に離れちゃったのは不思議だよな」

珠美も、例の謎を興味深そうに聞いていた。

「でも、桃花自身はどう思ってるの？ 知りたい？」

「気になるよ。でも、こんなの直接聞いたって教えてくれそうにないし……」

どこか諦めている様子だった。

「そうだ。聞くんじゃなくて私たちで調べちゃえばいいんだよ！」

珠美が提案した。

「ほら、今のブルーギルズには、情報通の綾音がいるし、珠美と蒼葉のコンビのおかげで、ホームページだってある。何かいい手掛かりがつかめるかもよ！ もちろん、私も力になるよ」

涼花が力強く言った。

「みんな、ありがとう！ 秘密っていいことばかりじゃないから、本音を言えばちよつと怖いけど、調べたい！」

桃花は立ち上がり、みんなの方に向かって意思表明をした。珠美たちの試練を乗り越え、心も強くなった。気になることはとことん探求したい。肝試しのために廃墟に不法侵入する若者のように、期待と背徳感に心を震わせた。

その頃、春山家では二人を迎えに行こうと月乃が出発の準備をしていた。居間のテレビのチャンネルはローカル局で、数週間後に迎える成人式の会場について報道されていた。

「月乃、何年も前から成人式には出ないの一点張りでバイトまで入れちゃったみたいだけど、本当にそれでよかったの？」

すぐには返事をせず、重そうなダウンジャケットに袖を通した。

「お母さん、うちの教え子たちはもうすぐ受験の大切な時期なの！ 教員になるための修業としても必要になってくるし、一日限りのイベントなんかよりずっと大事なんだから！ 前撮りで振袖は着たんだし、もう十分だよ……」

そう言い捨てる、玄関から車のキーをかっさらって出て行ってしまった。

「つ、月乃……」

母親は娘の豹変ぶりにショックを受けたのか、猛獣に一撃を食らった小動物のように力なくしゃがみこんでしまった。

ルームミラーにゆれるお守りは彼女の運転歴に見合わず所々糸がほつれ、紐も一度切れてしまったのか安っぽ

いゴム紐に取り換えられていた。そこには黒い夜空の下、満月を背景に吠える白い狼の姿。そして、交通安全ではなく、なぜか「勝守」と刺繍されていた。後部から西日を受けて、光沢のある一匹狼は禍々しく光を放ち、黒目と白目の区別のない目は鮮血のような赤を際立たせていた。

彼女の目は安全を意識して遠くに焦点を合わせていたが、心で見えていたのは夕焼け空のはるか彼方に消えていった遠い過去だった。

これまで、生息地を広げる外来魚のごとく浜塚市をめぐり、試合を通して出会った他校の選手の秘密を知って悩みを解決してきたブルーギルの中学生メンバー、涼花、桃花、綾音、そして珠美や蒼葉。しかし、彼女たちが解決すべき問題は未開の水域ではなく、生まれ育った池に沈んでいることにまだ気づいていなかった。

第二期に続く